

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成27(2015)年  
2月号  
通巻534号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成27年2月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷製  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



若き日の法主さんの油絵

(文・4頁)

平成4(1992)年8月2日

## 大倭を語る ― 野草塾での講演より〔1〕

法主 矢追日聖 (満80歳)

一九九二年真夏の七月三十一日〜八月三日まで四日間、野草社主催の第十二回「野草塾」が大倭紫陽花邑の大本宮を中心に催された。日本全国から参集された参加者、講師、スタッフを含めて総勢二百名強という多人数であった。

野草塾とは、「一九八四年以来、自然の流れにそった生き方を願う人々が相互に交流し学び合う場として」行われて来たものであり、なかでも第十二回のこの時は、その規模もさる事ながら、参加者全員で挙行する「祈りの場」の実現、また講師の方々の多彩性と参加者達の真摯な参加態度にも印象深いものがあった。

法主さんのお話は、開催三日目の八月二日、出口王仁三郎の孫で、作家の出口和明さんの後に語られたものである。

あの夏は殊の外、蝉の声がかまびすしく紫陽花邑のあちこちで響き渡っていた。あの限定された生命への、あらん限りの讃歌の様な鳴き声が、今も耳の奥深く残り、法主さんや出口和明さん、その他大勢の心安き人々がいたあの日の幻の如き集いが、夢ではなかった事を告げてくれる。  
(編集部 林修三)

### 大倭の教えを端的に

おはようございます。

皆さんは偉い方の講義とか話をテレビなどを通じて聞いておられると思いますけれども、私の話は口から出まかせ出鱈目というのでございます。頭の組織が雑に出来ておりますので、整然とした話を

することが出来ないんです。そういうような気持ちで聞いてもらったらありがたいと思います。

先程出口和明先生の大本教のお話を聞かせてもらいましたけど、非常に崇高な神ながらの摂理を良く説明されております。向こうの聖師(出口王仁三郎)さんの生き方というものが、私も良く理解できます。けど一般の人から見ると、かなり気遣いじみたところもあると思いますし、私自身もかなり気遣いの部類に入っております。その反面、何かの部分ではお役に立つこともあるし、これは生まれながらの宿命というようなものなんです。

大本の摂理のようなのは、大倭にもあるんですよ、教義というかね。そんなものは若い時に霊界の、大体聖徳太子から聞いておるんですね。仏教も神ながらも両方わかっている人です。ですから話にむつかしいし、私みたいなボンクラではなかなか理解出来ないんですけれども、端的に言いますと、「跼幽不」(かみくろふ)、「還元帰」(かえんき)、「太加天腹」と、ただそれだけ言われるんです。大倭のお祈りの時にもちよつと口にしますけれども、これはもう要約したエキスみたいなものになるらしく、大本の聖師さんが大事にされてましたものは、みんなその中に入っているんです。

太加天腹とは、普通で言う高い所というような高天原じゃないんですよ。大倭では哲学的な教えは必要ないと言われるから、あまり私は申さずにおりますけれども、その太加天腹の「太」というのは言霊で陽性のことなんです。「加」というのは陰性のことを言うんです。「天」というのは敬語で、神さんという意味です。そして「腹」は人間の腹部のことなんです。結局男の生殖器と女の生殖器のことで、それをずーっと拡大していくと、天地自然の中において我々がこうして生成化育されておる、宇宙の根本的な生命体になるんです。

だからあるキリスト教の人がね、大倭はエロクさいと言って笑うことあるんやけども、そうやっておるんやからしょうがない。

霊界の人の話聞きますとね、現代の神社形式は結局、太加天腹なんです。というのはね、あのお宮さんは女の人の陰部を象って作っているらしいんです。鳥居の入り口があつて、次の参道はお産の時の産道と合うみたいになって、そのもうひとつ向こうに本殿があつて、それが子宮なんです。

そう言うことあんたたち可笑しく思うかしれんけど、古代の人はエロみたいなこと考えてないんですよ。宇宙の真理というところから見ると、世界的にそれが一番良くわかるんです。先程出口先生もおっしゃってたけれども、宇宙の仕組みというもののは一方的なものじゃなく、両方が一つのものとなつて物事を産み出してゆくんですから、そんな原理は大倭も一緒なんです。大本の「おおも」というのも元の根本のことだし、ここ大倭の「やまと」というのは「おやまと」のなまりで、大倭と言えば大親元なんです。

だから大本も大倭もひとつ皮をむいたら同じことなんです。大体、霊的感応する人の行き着くところは、ほとんどがみな同じなんです。でも私は霊界から言われているそういうようなことは、もう飽いてんねん(笑)。

## 気遣いの家系

大本の聖師さんはあの世に行つてここにいらなけれども、私は現在この世に生きとんねん。だから質問によつてはどんな話も出来るんやけどね、今日は広大な話やなしに、人間としてのちっちゃい話をさしてほしいと思つてます。

私は昭和二十二年からこの山で居を構えてま

す。それから後のことは、去年私の満八十歳の記念に作ってくれた『やわらぎの黙示』(野草社刊)という本の中に書いてありますし、うちの宗教行事で人が集まった時でもよく話します。だから今日は、それ以前の成り立ちというものを少し皆さんに喋つてみたいと思つております。

やっぱり大根でも何でも、種時いた時に双葉が出ますけれども、最初はそれが何の芽かちよつとわかりにくいですわね。百姓して一年たち二年たち三年たちしてくると、茶色の丸こいちびこい種が大根、これは胡瓜というようにわかつてくるんや。それと同じことね、私の昔の話をしたいと思つねん。

私が物心付いてから後の家庭ですけどね、例えば夏の暑い時にでも家の障子全部閉めてますねん。絶対開けたらあかん。それでまた蚊くすべ(「蚊遣り」)しても、蚊を殺しても絶対いけない。また家の裏がちよど藪でしたからね、だんだんと竹の根が家の下に入つて来て、縁の下から竹の子出て来る。それが床を突き破つて天井突き破つても、それ刈つたら誰かがすぐ病気になるから刈られへん。そもそもほんまの気遣いの家や(笑)。それから、車の付いている釣瓶井戸から水を汲むんやけど、一日に朝から何杯と決まっている。子供が出来たかて洗濯すんのも炊事すんのも、その何杯という範囲内でしかしたらいけない。

そこへもつて来て、竈さんてあんたたち知つてるかねえ、七つの丸い口がだんだん小そうなつてきてね、小さい方でご飯炊いたりお粥炊いたりおかず炊いたり、一番大きいのは味噌の豆を炊く時に使う。そんなのが台所にあるんですよ。ところがね、女の人がおかず炊くのには醤油なんか使つてその入れ物を竈さんの肩に置いとくと、家のみんなが肩凝るねん。「竈さんの肩が凝る」というこ

とやねんな。

竈さんで炊く薪や柴は、一応外で作って来て、ツシってあんたらわかるか？ 田舎の民家の屋根裏とか天井裏の物入れのことや。そこに入れておいて、一年たつてから降ろすねんけど。うちも百姓しとりましたから、例えば秋になれば、枯れた茄子とか何かが畑にあります。それも焚けばいいんですけれども、そういうものや生のものを焚くと、その晩に必ず小便こくねん(笑)。事実私も小便して怒られたことあるけど、そら出るもんしょうがないわな。そうすると、うちのお祖母ちゃん「また生木焚いたな」と言うんやね。

そういうような恐ろしい家庭やった(笑)。そんなお祖母さんの居るところへ嫁に来た私の母親も、いわゆる神懸りで、もう毎日から晩まで神さんと話し合ひして暮らしている。言うたら氣違いの家系なんです。

私の親父は「もう氣違ひ二代揃って出て来やがった」って、私の母親がどうこう言う。「またド氣違ひ始まった」とか言うねんな。けど怖いから抵抗はようせんと、いつもボソボソ文句言うところ(笑)。

大正七年やったんかな、お祖母さんが亡くなった。そうすると父親は自分の世の中になつたと思つて、「何ももう『神さん神さん』て言う必要あらへん。人間の住まいしておる所なんやから、それらしくせないかん」と言うてね、今まで林みたひになつてた庭の木や竹を切つて掃除始めた。ところが、そのとたんに私の十歳上の姉さんが学校で倒れましてん。

私の母親はいつも仏壇のところに昼の仏飯供えに行くねんけど、それならスーッと御幣が出て来て、それがスルツとこけた(「ころんだ」らしい)。そして「ボタンとこけたらもうしまいやどーっ!

て聞こえた」と私に言うんや。

父親は「またド氣違ひ始まった」と言うてたんやけど、お屋過ぎてしばらくしたら、学校から「倒れた」と言うて連れて来てね。急性脳膜炎で三日か四日で死んでしもうた。現実には我が娘死んでるんやから、父親は「こりやかなわん。やっぱり逆ろうたら怖いな」と思つてね、「広い世界あんのに、なんでこんな窮屈なことして暮らさんといかんのか」って、今度は逃げることを考えた。

大阪の玉造という所で家を借りて、大正八年十二月暮れに七人家族で移つてん。そうしたら元旦に、その家の前に土左衛門が置いてあった。水死した人。誰が置いたんか知らんけど、そういうような縁起の悪いことになるわけやわね。私がまだ八つくらいの時、その人の枕辺に財布が一つ置いてあったのを覚えておるけど。

そして大正九年に流行性感冒が流行つたの、年寄りやつたら知ってるやろ。その時感冒にかからんかったのは父親と私の二人だけ。あとの五人全部が急性肺炎になつてしもうた。二階にも下にも病人はばかりで、結局その時子供二人を死なしたんやわな。

世の中も、ものすごく不景気になつてね、あつちの田売り山売りした金を持って行つたけど、ようけ使つてスッテンテン。子供死なして貧乏して、結局それでまた帰つて来てん。

## 因縁のある場所

なぜそんな不思議な、ややこしい家になつたのかと言えば、それが大倭神宮のある所にあつたからなんです。そこはものすごい因縁があるところなんです。

私の家の伝説から言うたら、大和の三輪が出雲でね、そこで奇稲田日女命が産まれている。けれども、八岐大蛇の執念が恐ろしいために登美(鳥見)の方へ移つて来て、ここで亡くなつてはるらしい。つまり大倭神宮が終焉の地なんです。

こんな大本の神さんは何て言われたか知らんで。稲田日女の霊は百七十七万くらい前からそこにあるらしいわ、ちよつと想像出来へんけれどもね。私は霊界の数字はわからんけど、それには何かの意味があるのかもわからんし。その時分からずでにそんな霊があるんで、「おおやまと」と言うんやね。人格霊の大親元ということ。

そして、その場所に住まいした私の家族が酷い目に遭わされたわけだけれども、その遭わせた霊魂は鞍馬の犬天狗。鞍馬に行つたら魔王さんと言うとるわ。その鞍馬の魔王さんはね、今からちよつと七百年ほど前に大國主命から、「ここをもし荒らす者がおつたらドシンドシ厳罰を与えよ」と命じられて、そこを守護していたらしい。

ま、こんなん霊界物語やけど。日本にある昔の伝説や言い伝え、そういうもののほとんどが、私が見てる所では神懸りとか靈的に見た話です。

例えば、『旧事本紀』に饒速日命が天の磐船に乗つて天を駆け巡り、生駒の山に降りて登美に行つたとあるわな。けど私が見とつたら、あれ何も現実の話じゃなくしてね、受胎するまでの霊界物語や。靈魂がフラフラと大倭へ出て来て、稲田日女の腹に入って受胎しとるといふことなんやな。

神懸りでは、大國主命とか大己貴命とか別の名前前で出て来るけれども本当は一体で、一番根元の名前は饒速日命。稲田日女と須佐之緒命のお子さんです。その饒速日命は、日本の神社をあちこちずつと見た時に、一番多く祀られている神さんで、



庶民と関係が深いんです。

そして、その系統が歴史的に言うたら長曾根日子の一族なんです。それが大倭神宮の辺りを中心として、北は丹波・丹後から南は熊野まで全部支配しておいた所へ、九州からの一族がやって来るんや。ヤマトの事情を知っていた塩土老翁という人が、「東に良い国がある」と言うので来たけれども、そこはすでに長曾根日子の一族が統括しておったんです。

それでヤマトと九州の戦になったけれども、勝っていた長曾根日子の方から講和の条件を出し、九州の方がそれを受け入れて、「国譲り」ということになったわけや。新しい大和の国の第一代の天皇として、神武天皇が即位した。

それから三年目かな、神武天皇四年の春、その感謝の祈りのために、敵の本拠であったその土地へお祭りに来られたんやな。「鳥見山中の靈時(「まつりのにわ」と言うねんけど、神武天皇のいわゆる聖蹟に直接関係があるんや。

(※昭和十五年、皇紀二千六百年の国家的記念事業として神武天皇聖蹟を顕彰)。

まあ、そんなところからもうずーっと因縁の繋がってきている場所なんです。

### あじさいアルバム⑮

## 法主アルバム

#### ● 表紙絵について

20代前半だろうか？ 法主さんが描かれた珍しい油絵で、「隆家」のサインがある。隆家は立教開宣以前に使っておられた名前。かつて、「宗教家にならなかつたら、何になりたかつたですか」と問われて、「絵描きになりたかつた」と答えられたことがあるというエピソードがある。

### 新宅の悲劇、始まる

それで今度は江戸時代、大倭神宮の所にあった私の家は庄屋やった。明治二年にその主人が、六歳の女の子と三歳の男の子を遺して亡くなったんです。それが私の曾祖父。曾祖母は後家を通して家を守った。この人もやはり靈感者やっとな。家督相続は男の子がするし、女の子には——これが私のお祖母さん——十歳の時、十八歳の青年を養子に迎えて、分家させるように考えたわけやね。

(※この時のお話のままではつじつまが合わないで、法主さんが以前『すさのお』紙に書かれた「一大事の因縁」によって修正しています。『ながそねの息吹』(野草社刊) 所収)

その時に、うちの敷地四百坪の中で、今の大倭神宮の場所が千古の杜さんでね、「あそこは手え付けたら怖い」と言われてた。けれども同じ敷地の中やから、明治四年、そこを屋敷にして二人の新居にしたらどうかということになった。

(※当時、明治新政府がこの杜の鬱蒼と天を覆う古木を徵発するという風評が流れていたこともきっかけになったという)



①撮影年月日が不詳だが、若き日の法主さん。



②聖歌「くにもと」の作曲者、成川真さん。神宮の境内にある、雑刀をふるう。(昭和16年11月2日)

それで、明治六年に新宅が落成してん。ところが仕事した大工さんは死んでしまう、石垣を積んだ石屋さんも死んでしまうと、不思議なことばかり。それでもちゃんと家が出来たからというので、そこで二人の結婚式をした。新婦十四歳、新郎二十二歳。私のお祖母さんとお祖父さんは、そこで住まいすることになったわけやわな。

けれども初めて寝た晩に、白い袴の人が出て来て、足で枕ボンと蹴飛ばしてしまっねんて。障子に恐ろしい影は映るし、そりやもうややくいしの出て来る。怖あて一晩も寝られへんから、元の家に戻ってん。そこで子供が三人が産まれます。

そんなわけで新宅は十年放ってあつてんけど、祈禱したんかなんか知らんわ。そこで住まい出来るようになって、一番最初に産まれたのが私の父親やってん。

けれども、長男が兵隊で戦争に行つて亡くなつてん。次男やつた私の父親は商売したくて大阪へ行きたかつてんけど、兄さんが死んだから跡取りになつてしまつて、しかたなく大倭神宮の所の家におつてん。先にも言うたように自分の母親と貰うた嫁さんの二人とも気違いやわな、それで父親は随分苦労したわけで、そういうようなところに私が育つてるんです。(続く) 文責 編集部



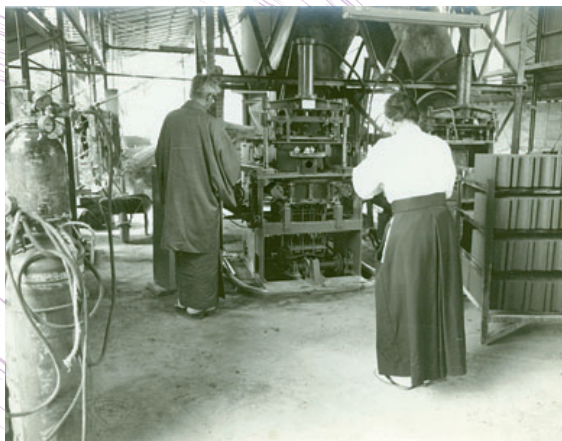
④手前は昭和25年から15年間、大本宮で住居として使われていた瑞光庵。後方が瑞光院。



③法主さん（後列右）が学生時代に共に下宿していた久保晴晴さん（後列左）と家主の氷上一家との卒業記念写真。（昭和9年3月25日）



⑥法主さんが写した大倭神宮の磐座（いわくら）。（昭和43年8月15日）



⑤大倭病院の開設以前にあった大倭コンクリートブロック製作所に新しい機械を設置した際に、法主さんが薙い清めをしているところ。（昭和44年1月9日）



⑧降誕祭の直会演芸会で邑の子供たちと記念撮影する法主さん。（昭和63年12月23日）



⑦文化行事で阿倍古墳群へ赴いた際に、立ち寄った特別養護老人ホーム大和桜井園で将棋で遊ぶ法主さん。（昭和46年6月20日）



ウクライナから日本に戻って

## チエルノブイリ、そして福島

岡山市 竹内 高明

1994年9月から2013年3月まで、18年半、名古屋に事務所のあるNPO「チエルノブイリ救援・中部」の駐在員としてウクライナで過ごし、その後両親の住む岡山に戻って、主にチエルノブイリ関連の翻訳と通訳の仕事が続けています。2011年に結婚したウクライナ人の連れ合いと暮らしているのですが、昨年11月に娘が生まれました。日本での震災と原発事故の年に結婚、ウクライナで戦争の始まった年に子どもの誕生日、個人的に喜ばしい事柄が偶然ながら社会の深刻な変化に重なっており、大変複雑な気持ちです。福島原発事故のその後のことはいつもずっと気になっていました。チエルノブイリ原発事故の事後処理作業をしたウクライナの人たちを個人的にたくさん知っており、彼らの健康被害について見聞きしているのも、今も福島原発で被曝しながら作業をしている人たちの今後がどうなるのか非常に心配なのですが、そういう話は今やどこからも聞かえてきません。昨年2月、通訳として、「救援・中部」がサポートしている南相馬市の農家のお二人とチエルノブイリ被災地の視察に行き、彼らを継続して取材していたTV局のクルーも同行しました。そのときは昨秋番組になりましたが、夜11時台の放送で、再放送はさらに遅い時間でした。南相馬の農家の方々は、汚染された自分たちの田で米を作り続けたいと、さまざまな工夫をこらして努力されているのですが、一昨年の収穫では、基準値の100ベクレル/kgよりは低いもののその前年よりも高い放射能の値が米から検出されてしまいました(正確な理由は未だに不明)。

活路を見出したいという思いもあって、チエルノブイリのスタディ・ツアーに参加されたのです。そして昨年には、放射能が不検出の米を収穫することができ、またナタネを栽培して放射能を含まない食用油を製造・販売することも始められました(植物が吸収する放射性物質は水溶性のもので、油糧作物の油には移行しない)。それ自体はともうれしいことですが、その喜ばしい成果を結末においたまとめの番組が新たに制作され、先日日曜朝にその放映がありました。それを観ながら、どうして前の番組が誰も観ないような時間帯、今度の「ハッピーエンド」の番組がこういう時間帯なのかと思ってしまうました。「帰還困難区域」の農家で、先祖伝来の田畑を耕すことがもうできないだろう方々もおられるはずなのですが、そして住み続けてきた土地に戻ることができない方々もあると思うのですが、そういう人たちのことは番組にならないのでしょうか。

そんなことを考えたのは、前日、福島原発事故とチエルノブイリ事故の両者を扱った鎌仲ひとみ監督の新作映画の先行上映会が岡山であり、観に行つたせいもあるかもしれませんが。監督が2012年にウクライナで取材をした際、私は通訳をさせていただき、今回の映画のセリフ翻訳のお手伝いも一部させていただきましたので、監督のトークが上映後あとと聞き、お会いしに行こうと思つたわけです。「トーク」って、いつからそういう言い方になったのか、どうして単に「お話」と言わないのか、と私は思いますが、それは監督の問題ではなく主催者の問題。そのトークの中で監督は、「今福島で、『復興』に関係のない報道に出ることは非常に難しい(勇気のいる)状況だ」と言われました。「悲惨な、危険な福島」と思われたくない」という人々の思いと、「なるべく何もなかった

ことにしたい」という国や電力会社の思惑が重なって、そういうことになっているのでしょうか。もうひとつ気になっているのは、インターネット上でのナショナルリズム的言論というのか、匿名のブログで国際情勢を論ずる日本人たちの中に、「ロシア」とか「アメリカ」とかいう国名を用いて、それらの権力争いについて嬉々として書き記す人たちがいることです。そういう形で、一つの国に住んでいる庶民も富豪も政治家もひとくりにされたのでは、たまったものではないと思います。外国に出る日本人や在日外国人の数は、数十年前に比べて飛躍的に増えていると思うのですが、そして具体的な一人一人の人間同士の、国を超えた触れ合いはたくさんあるはずなのですが、そういうことは集団としての日本人の意識をあまり変えていないのでしょうか。そして、他国の庶民の人権がどのように守られているのか、彼らが何を望んでいるのか、世界の人々がどうしたら争わず、誰かの犠牲の上に別の誰かの利益があるという状態をなくしていけるのか、といった問題意識は今の日本でどの程度共有されているのでしょうか。以上読み返してみると、まとまりのない「新婦朝者の苦言」みたいで、我ながら楽しくなく申し訳ありませんが、もう締切りの日ですので、とりあえずの「走り書覚え書」とさせていただきます。それこそっと具体的に、ウクライナの人々や場所の話を書けばよかったです。チエルノブイリの被災者の人たちは、その後福島の方々がどうなっているのか、今でも文字通り他人事ではなく心配しています。ウクライナ東部の戦争状態は泥沼化したまま継続しており、先日私の知人が召集され従軍しました。そんなこともまたお伝えする機会があればと思います。(※元邑人。野草社が紫陽花邑にあった当時の編集スタッフ)

## 幸福だった日本旅行から帰って

足あと

大韓民国慶尚南道河東郡

永信村代表

李得求

昨年11月19〜21日、韓国からハンセン病快復者の定着村の皆さんが来日、交流の家に宿泊された時のお礼状を『むすび便り』から転載させていただきます。

(編集部)

多少ためらいと申し訳なきをともない始まった日本旅行は25名の申請者があり私を勇気づけてくれた。しかし、不足する情報と言語疎通の難しさで負担になるのはどうしようもなかった。時間がたつにつれ参加人員が減り、お年寄りたちの人生最初で最後の海外旅行という趣旨がしぼんでしまいかもという気持ちにもなった。

やっとやると決心し、出発した13名の5泊6日の旅行だった。釜山から出航するパンスター大阪クルージングに乗ってみたら、とても雄大な船の中はホテルみたいに全てが備わった完璧な空間だった。うらかな晩秋の典型的な天気も旅行には最高だった。

大阪に到着し私たちを迎えに来たF・I・W・Cの会員たちと会いとでもうれしかった。大阪市内を観光し、とった昼食は親しみを覚えるものだった。

逆走行する気分で東大寺に到着した。雄壮だが繊細な日本人のスタイルが感じられる美しい広大な屋根の建物と、大きな寺あるいは大きな庭園のような空間で、ちよろちよろとつきまといながら楽しませてくれる鹿の姿を忘れられない。

日本に来たら温泉に行かなきゃと思い、行った温泉(ゆららの湯)は旅の疲れを充分にきれいに

つてくれ、帰る前にもう一度行ってみたいと思った。宿舎の交流の家に到着すると韓国で出会ったた皆さんの会員たちがすでに来ていて夕食の準備をし、自願奉仕しておられる(松本)モトさんの温かさや慈愛に満ちた様に真心がこもっていて、家族のように私たちを迎えてくださった。

交流の家が存在するに至った事情を聞いて、本当によくやったなあという気持ちになった。当時(学生時代)、委員長だった交流の家の(湯浅進)理事長とお会いでき、たくさんの話を聞いて、必ず韓国に来てくださるよう要請をさせていただいた。来年に必ずお会いしましょう。

家には50余年間の記録が全て残っていて、記録がとも生き生きと仔細にわたっていて驚いた。あるおばあさんが2004年に私たちの村のキャンプ時にとった写真の中に、天国に行った夫を見つげ涙を流す姿を見て、楽しく意味のある交流の時間だと思った。

最初に寝た量の部屋は一晚目は多少寒かったが、長い年月を耐えた木造建築の堅固さと自願奉仕者たちの姿を想像することができた。

二日目、錦市場を見て、同志社大学で昼食を食べに行つたところ、尹東柱とチョンジョンの詩碑がわれわれを歓迎するように建つていた。

二条城を見た時、「あはあ」と声がひとりどにピッと出る。当時の歴史的背景の解説を柳川さんの巧みな韓国語で聞いて、日本がより近く感じられる城内の絵や巧みな建物は、韓国人たちには必ず来て、見ると推薦したくなり、また百済のかわりを感じできる素敵なところでした。

感動の時間が流れ、日本での最後の夜、たくさんの話の花の中に咲いた貴重な出会いを分かち合いました。

お祖父さんと一緒に小学生で唯一参加したキム

ボヒョン君の大人らしい姿と天真爛漫によく溶け込んでいる姿から、マスコミを通じた暗い韓日関係よりは、明るい明日と一緒に歩むべき同伴者の国として、また訪ね、彼らを招待して、真心のこもったお互いを大切にしよう関係に期待した。

対話中に、私が日本語を習い1年後に競ってみよう、(佐々木)優君と(辻本)里奈さんに言った(※二人は韓国語を学んでいる)。約束を守ることをお互いにもう一度心に刻み、韓日関係改善に私も一翼を担うことを誓う。

終始一貫、一緒に行動した柳川、優、里奈に感謝のあいさつもろくにできずに帰国してしまい誠に申し訳ない。

過分な愛情をたくさん得て、満ち足りた気持ちで韓国に到着してみたらますます、一層会いたい、良い友人たちを得たという、本当に忘れられないできない旅行として心に大切にしまっておきます。協力いただいたたくさんの方々に感謝し「愛してます」。元気な姿でまた会いましょう。

2014年12月

(翻訳・柳川義雄)

◇永信村について(2009年の聞き書きより)  
1943年、4世帯8名がテントを建てて、乞食をしながら生活を始める。キリスト教関係者から援助を受けて暮らした。土地を少しずつ買い、樹木を切り石垣を積んで家を建てた。竹槍を持った近隣の村人から襲撃されそうになったこともある。バスやタクシーも乗せてくれなかったり商店や役場すらまともな対応をしなくなかった。1961年朴政権下で、村は財団法人として認可され政府の支援も始まり、豚・鶏・牛などの畜産業で生活も向上してきた。2009年現在、72世帯が住み、以前に比べ偏見や差別が少なくなっているが、まだ子孫の結婚などに問題が残っている。

# あじさい日誌

1月11日 祝会。

1月12日 午前9時半から西の齋庭で「大とんど」神事。今年も有志の方々により大根炊き・ぜんざい等が振舞われました。

1月15日 午前10時半から大本宮拝殿で大倭殖産(株)とその協力業者さんの「大倭安衛協力会」が安全祈願祭を行いました。

午後2時から大倭神宮月次祭。雨のため社務所での祭典。  
1月17日 午後、交流の家でF IWC定例委員会。

1月23日 大倭大本宮月次祭。この日は昭和52年1月(日付不詳)の法話をお聞きしました。

1月30日 夜、奈良市内の店で『おおやまと』編集部や文字起こし等々の協力者の皆さんとで新年会が開かれました。

2月3日 大倭大本宮で玉緒祭。この日は昭和52年2月3日の法話をお聞きしました(平成12年3月号『おおやまと』に「玉緒祭の日に節分の由来を聞く」として掲載分)。

2月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。

2月8日 祝会。久しぶりに齋藤正宏(福井市)・中村勝彦(三重県四日市市)さんが参加。

2月9日 法主様が帰幽されて満19年。午後1時40分奥津城でご挨拶、2時から拝殿において

帰幽祭が行われました。



大倭安宿苑では

(菅原園)

1月1日 44年目の創立記念日とお正月を祝いました。

(須加宮寮)

2月3日 節分。須加宮寮非公認キャラクターの「いわっしー」が登場しました。



(長曾根寮)

1月15日 (特養) 昼食に熱々のお鍋を囲みました。

1月20日 (デイサービス) クイズを工夫したり「若葉会」の皆様によるお琴の演奏で新年会。

(茂毛路園)

1月19日 ボランティアアさんに

よる毎月恒例の健康体操。

(八重垣園)

1月13日 花びら餅で初釜。

〔俳句〕「囀りや姿ちらりと枝の先」(川柳)「欧・中東国名忙し老いルーベ」

こだまこだま

大倭会館中 H27・2・9

岡山県加賀郡吉備中央町

大沼安史・羽倉久美子

略：引越しに忙殺されそちらに住所変更の連絡を差し上げず略：(3カ月分まとめ)

『おおやまと』をお送り下さいましてありがとうございます。12月号の「時」ということ

と、「霊の系統」の部分に大沼がいたく感動しておりました。(静岡県袋井市から)岡山市に移

ったのも何かのご縁と神はからいと思えます。今後とも宜しくお願い申し上げます。(羽倉記)

我が家の雪景色 H27・2・9  
岡山県真庭市美甘 湯浅 芳郎



年末から大雪で我が家も村も白一色です。二月一杯は雪の中、畑も田圃もゆっくりと春を待っています。大勢の方に来ていただいた一昨年の文化行事を思い出しています。「しばし背を向け遣り過」す雪しまき(雪しまきII雪まじりの強風)

## あんない

\*月次祭(大倭神宮)

3月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

\*大倭会主催第554回祝会  
3月8日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

\*月次祭(大倭神宮)

3月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

\*月次祭(大本宮)

3月23日(月) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

## 編集後記

▼昨年(大倭七十年)の金鶏祭(十一月四日)で矢追日聖法主、大倭神宮、大倭紫陽花邑、大倭有縁の皆様とのご縁をいただいた、丸二十年の節目を迎えた。「お蔭様で神人冥合法味悦楽の境涯になりました」と報告できればいいのだが、いまだにその心境とは程遠いところにいる。

五里霧中の状況で、心の中(想像上)の法主さんに「これからどうすればいいのでしょうか」と相談してみる。何度尋ねても温和な笑顔で「あんたの思ったようにやったらええがな」

こちらは「何がやりたかったのか、それさえわからなくなっているのです」と涙ぐむ。

どうやら霊界はあるようだし自ら逝ってもいいことはないらしい。なんとかお迎えが来るまでは現界にいないと!

視点を変えたくて、人生初のカウンセリングを受けてみた。子どもの頃から周囲に合わせるいい子を演じ、他人軸で物事を考えるクセがあるようだ。その結果、ありのままの自分の感情や感覚に蓋をしている。自分で自分に課した「〇〇してはいけない」という禁止令を、「〇〇してもいい」と許していくことで自分軸を思い出せるらしい。

「公中の私、私中の公」を心に中道を歩みたい。(鶴)